

● シリーズ 私の見た日本 Vol.181

日本の建築における曖昧性

丁 佳蓉 (テイ カヨウ)

中国・無錫市出身。
2018年明治大学建築学科卒業。現在、明治大学大学院
国際建築・都市デザイン専攻 修士2年(2020年4月修了
予定)



日本に来てから人によく聞かれることがある。「日本語は難しいですか?」と。難しいとは言えないが、簡単だとも言えない。最も難しいのは曖昧さを含む日本語独特の表現だ。夏目漱石が「I love you」を「月が綺麗ですね」と訳したという説があるように、日本語は曖昧な言語である。単刀直入ではなく、それとなく相手に伝える。

曖昧性は日本の象徴のようなもので、言語だけではなく、文化や芸術作品にも表れている。もちろん建築デザインにも反映されている。日本建築の曖昧さを研究することにより、日本における多様な建築作品の共通性を探求し、伝統的な日本建築と現代建築の関連性を見つけ、日本文化における根本的な精神を辿りたいと考える。

まずは室内と室外空間における曖昧性についてだ。建築と環境は離れるものではなく、お互いに浸透し、融合する曖昧な存在だと考える。

軒下 軒下は室内と室外の間に存在し、典型的なグレーゾーンである。軒だけではなく、縁板、柱、障子、これらの要素が軒下の曖昧な空間を組み立てている。太陽が輝いているときや夕日が差し込むとき、中庭で揺れる木影が障子に投影され、本当の風景が見

えなくても、自然の存在を感じるができる。このとき、曖昧さの表現は究極である。この半透明の障子が昔から日本人の美のセンスを育んできたのだと考えている。

中庭 東洋では、伝統的な中庭は龍安寺のような閉じた内部の空間のものが多い。屋外にあっても、四方壁や建物に囲まれ、内部に含まれた外部の空間のような曖昧な存在である。現代建築でもよく使われている中庭は、より多くの機能が与えられている。例えば、住吉の長屋の中庭は風景を楽しむ場所としてだけでなく、部屋と部屋をつなぐ橋でもある。この中間領域のおかげで、人と自然は密接に結びついており、光や四季の変化も生活の一部となっている。

開口部 開口部から自然を見るだけではなく、自然に触れることもできる。例えば、瀬戸内海を望む豊島唐櫃(からと)の豊島美術館は天井にある2カ所の開口部から、周囲の風、音、光を内部に直接取り込み、自然と建物が呼応する有機的な空間である。季節や時間の流れとともに内部空間も無限に表情を変える。この開口部があるからこそ空間が曖昧になっている。

素材 素材の物理性と使い方によって、建築は違う姿を現す。ガラスだけではなく、カーテンや障子も内外空間を融和することができる。透明なガラスが視覚効果で内側と外側を

つなぎ、半透明の素材が朦朧とした雰囲気空間にもたらす。

素材の使い方について、日本の建築家は独特な考えを持っている。例えば、隈研吾の中国美術学院民芸博物館は、ステンレスワイヤーで瓦を吊ったスクリーンで外壁が覆われ、瓦は太陽光をコントロールして、ミュージアムにふさわしいやわらかな光を室内に導いている。このスクリーンを通して、室内と室外の境界が効果的にぼやけ、地面に投影された揺れる光と影がより曖昧な空間をつくり出している。

次に内部空間の曖昧性についてだが、建築内部空間の機能にとって、機能空間の転化、流動性、偶発性、通用性はすべて曖昧性の表現である。

機能の不確定性 既定の機能空間は程度にもよるが、人に退屈さやくだらなさを感じさせてしまう。人々はこのような空間にいるとだんだん慣れて、探索意欲がなくなる。しかし、偶発性は空間に活気とおもしろさを与える。これらの不確定性要素の存在は空間に曖昧性と充実した機能をもたらす。

“People meet in architecture”という言葉でSANAAは、ROLEXラーニングセンターでこの意味を解釈している。ほぼ完全に

開かれ、外界と調和して共存するこの空間では、人々は座ったり立ったり、動いたり静かになったり、適切な姿勢で好きなところにとどまることができる。

動線の曖昧性 利用者自身の体験への注目と物事の無差別理念の影響を受け、日本現代建築の動線計画において選択性と多様性が反映されている。例えば、金沢21世紀美術館のレイアウトは、従来のツリー構造からネットワーク構造に変わり、利用者はデザイナーが決めた動線にとられず、自分の需要と好みに合わせて自分なりのルートを選択できる。**階の消失** 建築の階は一定土台範囲により多くの建築内部空間を得るために存在し、違う高度にある建築の二次元平面である。視覚の妨げの除去から直角度束縛解放まで、「階」の消失によって、人は建築内部空間の活動が二次元平面から三次元平面さらに四次元空間状態に変わった。例えば、藤本壮介の「House NA」の場合、床板がばらばらで相互交差になり、空間の明確な垂直区分がなくなり、階の境も曖昧になった。

最後に建築形態の曖昧性表現についてだ。ある形態について曖昧かどうかは単体では判断できないが、その形態が同時に二つの対立属性を持つとき、曖昧性を持っていると考える。

無秩序における秩序 中国古代建築が人に安定感、荘厳の美の対称性を与えるのに対して、日本の多くの建築は非対称的で、むしろ完全対称のものが珍しいほどだ。自然美学は非対称性のなかでバランスのいい美を求める。日本は自然を敬う心をもとに、建築造型は自然を模倣してつくられ、非対称の自然の美によって快適さを表していると感じた。例えば、日本の古代建築の代表的な桂離宮と法隆寺などがそれにあたる。

現代建築でもこのような非対称的な美が見られる。例えば、中村拓志の「Dancing trees, Singing birds」は、一見ランダムで無秩序だが、自然の環境をあるがままに受け入れた結果である。これは建築というより、菓のあり方に近い。「樹木のふるまい」に回答した内部空間では、住人の「生活のふるまい」が展開し、二つは共振する。このように無秩序形態で自然環境に合わせる秩序こそが曖昧性を反映している。

静止における流動性 直線は人に確定性と静態性を与えるなら、曲線の魅力は強い流動性をもたらすことにある。静的な建築における曲線は流動性と静止性が交じる曖昧性をつくっていると言える。また、曲線は建築の境界を弱め、建築と環境の関係が曖昧になる。例えば、SANAAの「River Building」は遠くから見ると、まるで浮かぶリボンのようで、すっ

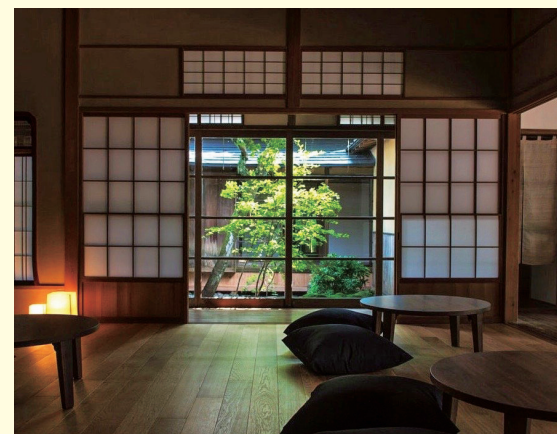
かり環境に溶け込み、空気のように軽く流れている。

硬さにおける柔軟性 コンクリートは建築材料として、硬い、しっかりとしたイメージだが、光の教会の十字架から差し込む光はコンクリートに暖かくて優しい印象を与えた。安藤忠雄はこのような素朴な素材言語を使って、芸術的な魅力が溢れる空間をつくり出し、曖昧なコンクリート美学をつくり出した。

本文では日本現代建築における曖昧性を研究し、日本の建築と文化伝統の現代建築における演繹と継承を探った。曖昧性という定義はさまざまな意味を持ち、その表現も多元化している。菊竹清訓の代謝建築論から石上純也の曖昧な空間まで、日本現代建築における曖昧性はある特定時期の産物ではなく、一貫性を持っていると感じる。これは代々建築士の共同継承と斬新な演繹によって実現したものだ。そして、その裏にある多元化表現を支える精神性と原動力は変わらない。形式が変わっても本質は変わらない日本人の魂であるように私は思う。



軒下



障子のある部屋



中国美术学院民芸博物館(内部)



中国美术学院民芸博物館(外部)



River Building



光の教会